

光化学協会創立40周年と光化学若手の会

大阪府立大学名誉教授 水野一彦

光化学協会が創立された1976年は、私が大阪府立大学の助手として赴任した年でもある。協会の歴史に自身の研究歴を重ね合わせ、大きな感慨・誇りを覚えるとともに、光化学協会が創立40周年を迎えたことに敬意を表す。

光化学討論会には、1971年の東工大での討論会に修士1年で出席したときから、米国留学中を除いて定年後の現在に至るまでほぼ毎回参加した。光化学協会と光化学討論会が私の光化学人生であると言って過言ではない。1972年に阪大工学部で大平愛信先生が討論会の世話人代表をされた折、修士2年で初めて口頭発表をしたのだが、座長が数件まとめて討論を行いますと言っていたのを知らず、他の会場係として席を外してしまった。直接の指導者の朴鐘震先生もおられず、実験に関する詳細な質問に恩師の櫻井洗先生が苦勞されて答えられたと後で聞いたことは、今でも記憶に新しい。

光化学協会の設立、並びに光化学討論会が協会主催になるまでの紆余曲折については、ほかの方に譲るとして、ここではまず光化学若手の会の歴史について触れたい。有機金属化学、有機反応化学等、有機系の若手の会や夏の学校は既に古くから毎年開催されており、若手教員や大学院生を中心に活発な討論が行われていた。しかし、協会設立当時、光化学討論会や日本化学会の年会を除けば、限られたメンバーによる文部省科学研究費関連の集まり以外に若手研究者が本音で議論する場がほとんどなかった。当時を思い起こしてみると、光化学討論会の最終日から翌日にかけてインフォーマルミーティングという、大先生とざっくばらんに話をさせて頂く機会があることにはあった。これは教員と若手が一緒に風呂に入り、飲食を供にし、話題提供もなされて、それなりに楽しく興味深い会であったが、やはり堅苦しさは否めなかった。助手になって2,3年経ち、親しくさせて頂いていた方々に、本音で議論できる会をもてないものか、できれば泊まりがけでいかがなものか、相談をもちかけた。当時はほとんどの大学が講座制をとっており、若手教員や学生が勝手に動くことは難しかったが、意外と多くの方の賛同が得られ、理解のある講座主任教授も結構おられることがわかった。意を強くして、当時は若手教員の太田裕之（東大）、辻本和雄（電通大）、富岡秀雄（三重大）の諸氏と私が発起人となり1979年7月上旬に文部省箱根宿泊所「静雲荘」において第一回有機光反応若手の会（仮称）の開催にこぎつけた。この会の特徴は、参加者が39名のうち有機系の講師、助手が大部分で、教授はゼロ、僅かな学生もほとんど博士課程の大学院生であったこと、話題提供の時間を制限し、討論時間は無制限にした

こと、特別講演の講師も当時はまだ助教授の城田靖彦先生（阪大）と閑春夫先生（群馬大）で、教授ではなかったこと、などがあった。

当初はまだ海のものとも山のものともわからなかった若手の会に、徳丸克己先生（筑波大）や田附重夫先生（東工大）の御尽力で、当時はそれほど潤沢でなかったと思われる光化学協会から資金援助を頂いたことは大変ありがたかった。教員の参加者の顔ぶれを思い出すと、その後ほとんどの方が光化学の分野で活躍されて名をなした年を迎えられており、若手の会の設立の意義は大きかったと思う。また、当時は大学院生であった新井達郎（筑波大）、二タ村森（東大）、真嶋哲朗（阪大）、保田昌秀（阪大）や若手技官の喜多村昇（東工大）らの方々まもなく定年を迎えることを考えると、改めて歴史の長さを感じる。翌年の第二回は海外留学のため参加できなかったが、第三回からは15年近く継続して参加した。記憶が確かではないが、その後すぐに、修士の学生も参加させて勉強させようという機運が盛り上がり、また物理化学系の方々が積極的に参加されるようになったことから、ある時期に「有機光化学若手の会」から「光化学若手の会」に名称変更がなされ、当初の雰囲気とは大きく変わってきた。それでも東日本大震災の年を除いて若手の会は毎年続いており、今年も現在私が在籍する奈良先端科学技術大学院大学の湯浅順平（現東京理科大）、西山靖浩、鈴木充朗のお三方が世話人となって第37回光化学若手の会が開催される。

次に光化学協会の話をしたい。藤嶋昭先生（東大）が会長になられた1998-1999年、私は光化学協会の常任理事（光化学協会誌担当）に指名され、これ以後、協会関連の行事に数多く関わるようになった。これまで育てて頂いたことを考えて、光化学協会のみならずアジア光化学協会の委員やIUPAC組織委員、2003年に増原宏先生（阪大）が組織委員長を務められ奈良で開催されたICP国際光化学会議、入江正浩先生（九大）が組織委員長を務められ京都で開催されたIUPAC国際光化学会議、J. Photochem. Photobiol. C. Photochem. Rev.誌の編集担当など、できる限りのお手伝いをした。定年前の2008-2009年には、協会の会長職を仰せつかった。前任の井上晴夫先生（首都大東京）が積極的な改革をされたので、それをより継続的に発展させるのが私の役目となった。また、会長任期中には1984年に大辻吉男先生が世話人代表を務められて以来25年振りに大阪府大で光化学討論会のお世話もすることになった。当時、協会運営でご協力頂いた常任理事や理事の方々に、また討論会開催でお世話になった大阪府大の方々に、改めて御礼を申

上げたい。

今、あらゆる分野で光が脚光を浴びており、光化学も幅広い領域で益々発展していくことは間違いない。この先10年、20年と光化学協会の限りない進展を心から祈願するものである。

平成28年5月27日

みずのかずひこ

大阪府立大学名誉教授、奈良先端科学技術大学院大学客員教授 [略歴]1976年大阪大学大学院工学研究科博士課程修了（工学博士）、1976年大阪府立大学工学部助手、講師、助教授を経て1996年教授、1979-1980年テキサス大学ダラス校博士研究員、2000年大学院工学研究科教授、2011年定年退職、2004-2008年アジア光化学協会事務局長、2008-2009年光化学協会会長、1986年有機合成化学奨励賞、1996年光化学協会賞、2006年光化学協会特別講演賞、2012アジア光化学協会功績賞